

で き ご と

平成 28 年 11 月 7 日（月）8 日（火）に国立国会図書館国際子ども図書館で平成 28 年度「国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って」が開催されました。参加者は全国で児童サービスを担当している図書館員、児童書研究者、児童書出版関係者等です。今回は「子どもに本を手渡すために—児童文学基礎講座」をテーマに、そもそも児童文学とはどのようなものかということや、国内外の児童文学の歴史、絵本について学びました。

（2 ページ目にて、概要を紹介します。）（眞子）

また、11 月 16 日（水）には沼津市立図書館、18 日（金）には静岡県総合教育センターを会場に、県立中央図書館新刊児童図書巡回展示研修会を行いました。内容は、公共図書館や学校図書館において子どもと本とを結ぶ活動に関わる方々を対象に、当館が全点購入している新刊児童図書約 1,000 冊（約 3 か月分）を現物展示し、選書に関する研修を行う、というものです。沼津市立図書館で行った際は、講師に横浜市立中央図書館の山崎祐司司書をお迎えし児童書選書方法についてお話を伺いました。

（3 ページ目にて、概要を紹介します。）（仲本）

◇子ども図書研究室の テーマ展示◇

ただいま展示中です！

- ◆花の本
- ◆「ニッサン童話と絵本のグランプリ」と子どもの本に関する賞
- ◆追悼 佐藤さとるさん
ディック・ブルーナさん

◇イベント情報◇

◆静岡県立中央図書館企画展

「静岡発！昭和の幼児指導絵本『あそび』展」

会場では、絵雑誌「あそび」がつくられた時代背景や「あそび」の実物、原画の他、同時代の子どものための雑誌を紹介します。

●会期 2月14日（火）～3月16日（木）午前9時～午後5時

※3月6日（月）は休館

●入場 無料

●会場 静岡県立中央図書館3階展示室（静岡市駿河区谷田53-1）

●問合せ 県立中央図書館企画振興課企画係（電話：054-262-1246）

◇海外の主な受賞作品のうち、最新受賞作をお知らせします。◇

賞名	受賞作品（*印は当館未所蔵）
カーネギー賞	『One』（Sarah Crossan／作 未邦訳）*
ケイト・グリーンウェイ賞	『The Sleeper and the Spindle』（Chris Riddell／作 未邦訳）
ニューベリー賞	『The Girl Who Drank the Moon』（Kelly Barnhill／作 未邦訳）*
コールデコット賞	『Radiant Child: The Story of Young Artist Jean-Michel Basquiat』（Javaka Steptoe／文・絵 未邦訳）*

イギリスの伝統ある児童文学の賞に、児童書を対象としたカーネギー賞と、絵本や挿絵を対象としたケイト・グリーンウェイ賞があります。一方アメリカでは、最も優れた児童文学にはニューベリー賞が、絵本にはコールデコット賞がそれぞれ贈られます。

児童文学連続講座「日本の児童文学 —『声』の時代、『声』のわかれ」

平成28年度の国際子ども図書館児童文学連続講座は、児童文学概論、日本児童文学概論、外国児童文学概論、絵本概論の4つの視座から子どもの本に関する基礎的な知識を学びました。講師は川端有子氏（日本女子大学教授）、宮川健郎氏（武蔵野大学教授）、石井光恵氏（日本女子大学教授）の3名です。その中から、宮川氏による講義「日本の児童文学—「声」の時代、「声」のわかれ」について報告します。

就学前後の子どもは、W-J・オング『声の文化と文字の文化』（藤原書店）によると、文字のない「声の文化」を生きています。宮川氏のイメージでは、子どもの体には「聞くことのコップ」のようなものがあり、子どもに本をたくさん読んでそのコップを満たしてあげること、子どもは自然とひとり読みへと移っていくのだそうです。声の文化にある作品からは、「声」が聞こえます。この「声」は、日本の現代児童文学を考える上で大きなわかれ道を示します。

日本の現代児童文学の成立は「声」とわかれたことから始まるそうです。その代表的な例として1959年に出版された佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（講談社）の登場があげられます。この本は、声に出して読むのではなく、黙読で物語を楽しむ世代を読者として想定して書かれています。それは日本の児童文学の主流が、それまでの耳で聞いて理解できる、楽しむ幼年文学から、黙読できる子どもへの緻密な文章で綴る長編の文学へと変わるわかれ道だったのではないかとのことです。これは、詩的・象徴的なことばで心象風景を描く「近代童話」から、より散文的なことばで子どもをめぐる状況、社会と子どもの関係を描く「現代児童文学」になったことでもあります。

また、音読から黙読で楽しむものへと移行し

ているのは、児童文学だけでなく文学全体の大きな流れでもあるそうです。

声とわかれたことによって、日本の児童文学はその読者層を10代の子どもへと引き上げました。宮川氏によれば、現代の作家が力をふるっているのはヤングアダルト文学です。その一方で、まだ声の文化の中にいる子どもが読んでもらったり、読んだりできるような幼年文学の空洞化・希薄化が感じられるそうです。小学校3年生くらいまでの声の文化にいる子どもには、本を読んで聞かせてもらう身体と身体とのつきあいが必要とのこと。「声」の聞こえる作品として、『すみれちゃん』（石井睦美／作 偕成社）、『きのうの夜、お父さんがおそく帰った、そのわけは……』（市川宣子／作 ひさかたチャイルド）などが紹介されました。児童文学が声とわかれている現在、今後は声の聞こえてくるような日本の児童文学作品がより豊かになることが期待されます。

児童文学連続講座の講義録は、翌秋に発行され、国際子ども図書館のホームページで見られることもできます。講義の詳細やその他の講義をお知りになりたい方はご覧ください。

所蔵資料から



文学

『だれも知らない小さな国』

佐藤さとる／作

村上勉／絵

講談社 1969年

（初出 1959年）

小学生のぼくはある日、小山で小さな人と出会う。大人になって彼らと再会し、彼らの住む山が人の手に渡ったり再開されたりしないようにと奔走する。コロボックル物語シリーズ最初の1冊。講義では日本の現代児童文学のはじまりとして紹介された。村上勉による挿絵は1969年刊から。2015年には新たにイラストを描き下ろした新版も出版された。（眞子）

新刊児童図書巡回展示研修会報告「横浜市立図書館の児童書選書方法について」

平成28年度県立中央図書館新刊児童図書巡回展示研修会を行いました。11月16日(水)に沼津市立図書館で行われた際は、講師として横浜市立中央図書館の山崎祐司司書をお迎えし横浜市立図書館の児童書選書方法についてお話を伺いました。

横浜市は人口約373万人、面積437.4km²の政令都市です。図書館は中央館、地域館17館で成っており、中央館には約150万冊の蔵書があります。

横浜市立図書館では、児童書新刊を中央館と地域館の司書が手分けして読み、選定票(ブックレビュー)を作成しています。また作成後に会議を行い、横浜市立図書館全体として評価を付け、その評価を元に本を購入するシステムを構築しています。

子どもたちには成長段階に合った本を提供すべき、との考えから、司書は児童書を1冊1冊読み、その内容や対象年齢を把握しなければなりません。横浜市では平成6年から、書店見計らい購入が中央館のみ可能となり、児童書現物選定ができない地域館のために、上記のシステムが構築されました。新刊児童書の評価を市の図書館全体で共有し、その評価を元に各館ごとに必要な児童書を購入しています。

評価の詳しい方法は次の通りです。横浜市立図書館では「絵本」「物語・文学」「ノンフィクション」とカテゴリー別に、資料を評価する際の留意点を定めています。絵本であれば【起承転結があり、構成が整っているか】【絵からストーリーが読み取れるか】など、ノンフィクションであれば【対象に適切でわかりやすいか】【レイアウトが見やすく効果的に使用され、内容の理解を助けているか】などの留意点です。

児童書選定をする司書は全館合わせて17人います。各館の司書は、中央館から振り分けられた新刊児童書を毎週1~7冊程読み、上記留意点にあてはまるかどうか確認しながら、選定票を作成します。このとき読み手である子どもの立場に立つことを心がけ、個人的な感想でなく客観的に本を判断します。蔵書構成の考え方としては、新しい本を入れ古い本を捨てるのではなく、長く読み継がれた古典や、時間が経過しても読み継がれる本を備え、そのうえで子どもを引きつける新しい本を入れることにしています。また、1つの本を必ず複数館の司書が読み、評価が独りよがりにならぬよう気をつけています。

選定票作成後、中央図書館で毎週行われる「全館資料調整会」内で担当者たちが話し合い、横浜市立図書館として総合評価を決定します。Aを最上位として6段階の評価をつけます。上位A、Bの評価がついた児童書については、市全図書館で所蔵すべき資料として購入検討します。付けた評価などは書誌情報へ入力し、全職員で共有します。A評価の本については紹介文を作成し、ホームページ内で「今月のおすすめ本」として紹介するなど、外部へ発信しています。

当日は、横浜市立図書館で評価し、良い評価がつけられた児童書を展示しました。『アマミホシゾラフグ』(ほるぷ出版)、『アンドルーのひみつきち』(岩波書店)など、一部の本については講師から紹介があり、良かった点などを解説していただきました。

今回お話を伺って、横浜市立図書館職員の方々が、日頃から真摯に児童書と向き合っていることに、たいへん感銘を受けました。講師からは最後に「この本面白かったと思ったら、それをぜひ子どもたちに伝えてください。」というメッセージをいただきました。(仲本)



知識

『イルカと話したい』
村山司／作
新日本出版社
2016年9月

海洋学部教授である著者が、イルカと話す夢を科学的に実現するため、日々行っている研究を紹介した本。主にはイルカの生態や人間との関わり、伝承、イルカの視力や知力などについて書かれており、イルカの事を詳しく知るのに役立つ構成になっている。著者がイルカに、文字や声真似を使って言葉を教えるという実験を試みた結果は、本書を開いてご確認を。最後に著者は、人とイルカが話すにはまだその第一段階をクリアしたところであり、今後更なる研究が必要と述べている。【中学生から】(仲本)



文学

『あかりさん、どこへ行くの?』
近藤 尚子／作
江頭 路子／絵
フレーベル館
2016年10月

春から小学6年になるぼくは母と妹、祖母の「あかりさん」との4人暮らし。パーキンソン病のあかりさんは最近、ないものをあると言ったり、ぼくのお弁当をつまみ食いしたりと「へん」な行動をとるようになる。それは認知症のはじまりだった。日を追って祖母の症状は進み、ときには家や家族を忘れてしまうことも。単身赴任中の父には家を頼むぞと言われたけれど、ぼくの日常はどんどん崩れていって……。迷い困惑しながらも認知症と向き合う主人公と家族の物語。【小学校高学年から】(眞子)

絵本

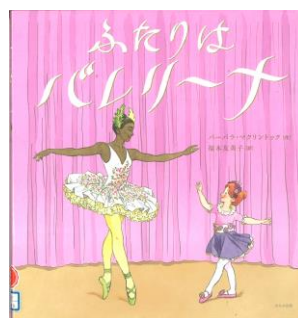


『ざざ虫 伊那谷の虫を食べる文化』
ふしぎびっくり写真えほん
松沢 陽士／写真・文
フレーベル館

2016年10月

冬、長野県伊那地方に流れる天竜川では、冷たい水の中でざざ虫漁をしている。ざざ虫とはトビケラやカワゲラ、ヘビトンボなどの水生昆虫の幼虫のことで、伊那谷では昔から食べられてきた。川底の石をひっくり返して足で踏み、こする伝統的な漁法「虫踏み漁」や、その調理法を写真とやさしい語り口で紹介する。この地域独特の文化で今では漁師も食べる人も減っているというが、若い世代に伝える動きもあるという。読み終わるとぜひ食べてみたいと思わせる魅力がある。【小学校中学年から】(眞子)

絵本



『ふたりはバレリーナ』
バーバラ・マクリントック／作
福本 友美子／訳
ほるぷ出版
2016年10月

ちいさなエマとおおきなジュリア、二人ともバレエが大好き。会ったことのない二人だが、おはなしの最後には、まちの劇場で観客と出演者としてクロスする。そんな二人の一日が描かれている。

二人がいる場所は違うが、同じ時間を同じページで並べていることで、年齢や身体、バレエテクニックなどが違う、似ていないようで似ている二人が見えてくる。二人が出会う場面は、エマからジュリアにつながる希望や未来が見えて心が温まる。【小学校低学年から】(青山)